獣の刻印

その正体は何でしょう

獣は、子羊の角に似た二本の角があり、「竜」のようにものを言い、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させると,神は述べています。（ヨハネの黙示録１３章１１～１６節）この刻印を拒む人はものを売ることも買うこともできない。恐ろしい最後の災いが獣の刻印を有する人の身に降りかかるだろうと神は述べています。その正体は何でしょう。あなたはそれを持っていますか。誰かがあなたにそれを*強制的*に押し付けることができるのでしょうか。獣の刻印とはなんらかの形でこっそりあなたに宿ることができるのでしょうか。刺青を入れられたり、マイクロチップのを皮膚の下に埋め込まれるのでしょうか、それともプラスティックのクレジットカードや身分証明書の形となって財布やハンドバッグに秘かに潜りこむのでしょうか。獣の刻印が何であるか知る必要があるのです。

ガーナーテッド・アームストロング　著

何百万という人たちが深い関心を寄せています。何百万という人たちがこの恐ろしい「獣の刻印」とその数字、６６６について聞いたことがあります。これについては多くの学説も出ています。この数字６６６はローマ法王の冠だと主張する人もいれば、この数字は皮膚の下にあり、マイクロチップを使って額に埋め込まれたものだと主張する人もいます。それはお金の新しい形、つまり来るべき「現金の要らない社会」と関係があり、デビットカードやクレジットカード（それには数字６６６が含まれていると断言する人がいます）が現金にとって代わるだろうと多くの人が信じています。

聖書には得体の知れない獣の刻印を受け入れる人たちについて、厳しい警告が書かれています。獣の刻印についてキリストから教わって、その姿を目撃したのは弟子のヨハネでした。彼は次のように書いています「また、わたしは大きな声が神殿から出て、七人の天使にこういうのを聞いた。『行って、七つの鉢に盛られた神の怒りを地上に注ぎなさい。』

「…*獣の刻印を押されている*人間たち、また*獣の像を礼拝する*者たちに悪性のはれができた。」（ヨハネの黙示録１６章１，２節）

神の怒りに触れたのは獣の刻印を受け入れた人たちだけでなく、「獣の像を礼拝する」人たちも含まれている点に注目してください。

「獣の像」とはいったい何でしょう。それをどのようにして認めることができますか。獣の刻印とはいったい何でしょう。あなたはそれを受け入れない, あるいは神の怒りに触れないと確信できますか。

宗教的欺瞞とバビロンの言葉の混乱

獣の刻印の意味に関する不気味で馬鹿げた説は数多くあります。ある人たちにとっては、この不可解な刻印の中に一流デパートのクレジットカードも含まれています。
宗教関係の出版物は、大規模チェーン店の一部が発行するクレジットカードに６６６という数字の存在が発見されたことを含めて、様々な「証明」を挙げています。彼らにとって、このクレジットカードが獣の刻印を表しているのです。

またある人にとっては、社会保障番号は政府が彼らの行動を把握するための手段なのです。それは獣の刻印の前触のように、「官僚的な」国粋主義政府が私たち全員を監視したり、私たちの行い、行き先、買物、所属する教会についてあらゆる情報を握り、私たち個人の私生活についてすべてを知り得る、国民の身分証明書の第一段階ではないのかと多くの人が思い始めています。監視されるという被害妄想的な不安を抱くと、多くの人は運転免許証、社会保障カード、クレジットカード等の様々な形の個人識別カードが獣の刻印だと思い込んでしまいます。

買い物をすると、どの商品にもついている黒い縞模様が獣の刻印であると主張している記事を読んだことがあります。包装についている細い縞模様が怖いのだと思っている人が大勢います。実際は、縞（バー）の一つ一つが符号のように文字や数字を表しているだけです。スキャナーが一瞬のうちにその符号を読み取り、レジについている小さなスクリーンに金額を表示します。買い物客は各商品、例えばサヤインゲンの缶詰が価格と一緒に表示されるのを見ることができます。コンピュータが自動的に店の在庫品目からサヤエンドウの缶詰一つを減らし、棚に残っている缶詰を苦労して数える旧式の方法を省いて、同時に当日の売り上げを計算してくれます。このような現代の方法では手間が大いに減り、おかげで私たちはレジをずっと早く通り過ぎることができ、しかも人間の手でレジを打つよりはるかに正確です。

コンピュータ時代におけるこのような最新の, しかもずっと簡単で急速な技術の発展はだれにとっても決して怖いものではありません。しかし, 被害妄想に陥りやすい一部の人たちは, 人の不安をもて遊ぶ宗教界のペテン師にとって格好の餌食です。被害妄想を抱く人の中にはスーパーコンピュータが自分を見張っているとか, 黒いヘリコプターが自分たちを監視しているので, 政府機関が秘かに自分たちに獣の刻印のラベルを張りつけないように警戒していなければならないと信じきっています。こうしたことはすべてでたらめな話ですが, 恐怖につけこむペテン師たちは疑わしい政府の監視やスパイ行動について声高くいつまでも警告し続けます。

この悪徳極まりない混乱を払いのけて、不思議な獣の刻印が本当は何であるか、また刻印でないものは何かを理解するために、神の言葉を直視するべき時です。

獣とは誰であり、また何であるのでしょうか？

獣の刻印が何であるかを理解する前に、獣とは誰を指すか、また何であるかを理解しなければならないのは明らかです。

ネブカドツアル王が見た巨大な像（ダニエル書２章）の象徴的な意味は、古代バビロンから、ペルシャ、ギリシャ・マケドニア最後にローマに至る四大世界帝国を表しているということで、聖書の研究者の意見はほぼ百パーセント一致しています。

聖書の解説書はほとんどがこの見解を説明していて, 有名初心者用聖書ハンドブック, ハーレーでもその見解を再確認しています。（ハーレー聖書ハンドブック, ３４２ページ)。純金の頭は古代バビロンを表しました。銀の胸と腕はペルシャを表し, 青銅の腹と腿はアレキサンダー大王のギリシャ・マケドニア王国を表しました。鉄のすねと「一部が鉄で一部が陶土」からできた足は統治期間全体のローマ帝国を表し, これには同じ地域で連合しキリストと戦うことになる将来の１０の終末国家も含まれます。（ヨハネの黙示録１７章１２～１４節）

特に４４節に注目してください :「この王たちの時代に[王たちは１０本の足の指を表しています]、天の神は一つの国を興されます。この国は永遠に滅びることなく、その主権は他の民の手に渡ることなく、全ての国を打ち滅ぼし、永遠に続きます。」（ダニエル書２章４４節）

幻の中でネブカドツアル王は、職人の道具や人間の手を加えることなく奇跡のように切り出された石を見ました。落下する隕石のように、その石は天から勢いよく降ってきて、純金、銀、青銅、そして鉄や陶土でできたそびえ立つ像を粉々に砕くように思われました！夢の中で、像全体が地面に倒れ、「夏の脱穀場のもみ殻のようになり、風に吹き払われ、跡形もなくなる」ように思われました。」（ダニエル書２章, ３５節）

それから１０本の足の指（古代ローマ帝国の範囲内で起こる終末の十の国を表しています）の像を打ち砕いた石は、地球全土に及び大きな山になったようです。

このように、この短い章の中にも、ネブカドツアル王からキリストの再臨に至るまで人間の歴史の全期間を見通した予言があることがわかります。

聖書は故意に「獣」という言葉を使いますが, それは世界を支配する国の異教の支配者たちが獰猛

な肉食獣のような心を抱いていたからです。ネブカドツアル王の７年に及ぶ狂気（ダニエル書４章）は、引き続き世界を支配する４人の王国の指導者たちのような正気ではない獣的な行動を象徴しており、現代ではスターリン、ヒトラー、ポルポト、のような人達です。

ヨハネの黙示録１３章に登場する最初の獣はダニエル書７章の第４国と同じであることは非常にはっきりしています。次の節に注目してください：「また、わたしは海の砂の上に立っていた。そして一匹の獣が海から上がって来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。それらの角には十の王冠があり、頭には神を冒涜する様々の名が記されていた。」

「わたしが見たこの獣は，豹に似ており，足は熊の足のようで，口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた。」（ヨハネの黙示録１３章１，２節）

獣は超大国の象徴です。獣が海の中から上がって来たというのは，その獣が大多数の人々から力を得たことを示しています。７つの頭はこの獣の力が７回復活しては登場することであり，十本の角は個々の国の象徴であり，その国はそれぞれ「王冠」が象徴している王または絶対的な支配者によって支配されます。これら７つの続いて起こる国にはそれぞれ」「神を冒涜するさまざまな名が」「記されていたというのは，精神的な力との結合を表し，それはヨハネの黙示録１７章で「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母、」と呼ばれています。

獣が「豹に似ていた」というのは、体の主な部分が豹のように見えるという意味ですが、これは、ダニエル書の２章および７章両方の記述が歴史上でも達成されたことで立証されているように、アレキサンダー大王の帝国を象徴しています。その中では、歴史上続いて起こる世界を支配した四大帝国について詳しく述べています。「熊の足のような」足は古代ペルシャ帝国とキュロスを指しています。

「獅子の口のような」口は古代ローマ帝国を指しています。「竜」は明らかに悪魔サタンを指しています。次の言葉に注目してください：「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わすものは…」（ヨハネの黙示録１２章９節）

従って、この終末の獣の力は歴史の中で何度も現れる同じ古い国家制度の最後の終末的な復活であって、それは大いなる試練、主の日、丁度キリストの再臨が始まる前まで続きます。

獣に力を与えるのはサタンであることに注目してください。（ヨハネの黙示録１３章４節）獣はときどき人間の指導者，１０人の王を支配する絶大な独裁者を指すこともあります：「わたしはまた、あの獣と地上の王たちとその軍勢とが馬に乗っている方とその軍勢に対して戦うために，集まっているのを見た。

「しかし、獣は捕えられ、また、獣の前でしるしを行った偽預言者も一緒に捕えられた。このしるしによって、獣の刻印を受けた者や、獣の像を拝んでいた者どもは、惑わされていたのであった。獣と偽預言者の両者は、生きたまま硫黄の燃えている火の海に投げこまれた。」（ヨハネの黙示録１９章１９，２０節）時には、「獣」という言葉は１０の国全体の連合と人間の指導者たちを指すこともあります。

現在私たちは、「獣」はキリスト教の再臨の前に一体となる１０の国の連合体であり、それはこれまでに存在した世界の中で最も大きな経済的、軍事的強国になるだろうということを知っています。１０の国の連合体はローマ帝国の最後の「復活であり」、今回の連合体は化学、生物及び核兵器で武装され実際キリスト教に戦いを挑もうとする強大な軍事国家です。

「また、あなたが見た十本の角は、十人の王である。彼らはまだ国を治めていないが、ひとときの間、獣とともに王の権威を受けるであろう。

「この者どもは、心を一つにしており、自分たちの力と権威を獣にゆだねる。

「この者どもは子羊と戦うが、子羊は主の主、王の王だから、彼らに打ち勝つ。子羊と共にいる者、召された者、選ばれた者、忠実な者たちもまた、勝利を収める。」（ヨハネの黙示録１７章１２～１４節）獣は１０の国の政治権力ですが、それは強大な教会の力によって「制圧」され支配されています。

この大きな政治、軍事及び教会の強国はしるしを持つだろう：それは、識別ラベルつまり刻印であって、その意志に従うすべての人にそれを押し付けようとするだろう。それは「秘密の」しるしとか刻印ではなく、公然と表面に現れすぐにわかるしるしであって、組織全体がラベルのようにそれを身につけています！ダニエル書７章８節に現れ、「尊大なことを語り」「時と法を変えようとたくらんだ」「小さな角」は、邪悪で不可解な宗教の代弁者を象徴しています。この代弁者は何世紀もただそういうことをしてきたのです！ 彼らは神の法を変え、神がお決めになった安息日や年毎の聖なる日を廃止しました。

偽りに満ちた教会は太陽崇拝と関係のあるラベルを取り入れ、神が決めた道に一度の安息日を日曜日（太陽の日）に変え、疑うことを知らない何百万もの信者にイシュタル（イースター）や「サトゥルナリア」（クリスマス）といった異教の祭日を押しつけました。何世紀もの間、数え切れない人たちが獣の刻印を受け入れることを断り、その代わりに神の定めた聖なる安息日、年毎の聖なる日を固く守ろうとしたために、残酷な迫害を受け、苦しめられ、生きたまま火あぶりにされ、最も恐ろしい方法で殺害されました。

何世紀もの間，アビブまたはニサン月（聖なる年の１月）の１４日に過越しの祭りを祝い続けた人たちは「フォーティーンサーズ」や「クウォートデシマシ」という呼び名をつけられ容赦なく捕え

られ殺されました！これは時と法に関係があったのです！「聖餐」または後にそう呼ばれるようになった主の晩餐（１コリント信徒のへの手紙１１章２０節）を行うのは、キリスト自身の最後の晩餐の年に一度の記念日でした。それはユダヤ暦によれば最初の月の１４日に行われなければなりませんでした。しかし背教者の教会は、キリスト教徒は、まさしくイエスがされたような聖なる過越しの祭りを守ってユダヤ教徒化してはならず、その代わりに異教のイースター（無音の「ｈ」を含む「Ishtar」（イシュタール）と綴ります）に置き換える、という法令を出しました。イースターは、（ウサギと卵）という性と生殖の象徴として祝い、完全に異教から起こったということが知られています。このようにして、軍隊の力に支持された法令によって、いまや異教となった背教者の教会は、生命の危険を感じて従った人たちに「時と掟」の変更を強要しました。獣を識別するしるしや獣の像は、何世紀もの間私たちの周囲に存在していたものであると聖書は教えています。それは、受け入れることを拒んだ無数の人たちの死を招いたものです。従ってそれはコンピュータチップやクレジットカードのような最近発明されたものではありません。

獣の像とは何でしょう？

いいですか、主の日に神の怒りに触れるのは獣の刻印を受け入れる人たちだけではなくて、「獣の像を拝む」人たちも含まれます。次の証に注目してください：「第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。」だから、獣の刻印を拝もうとしない人だけではなく、獣の像や教会内のそれに相当するものを拝もうとしない人も怒りに触れたのです。続いて読んでみましょう：「また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその額か右手に刻印を押させた。」

「そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。」

「ここで知恵が必要になる。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。」（ヨハネの黙示録１３章１５～１８節）従って、殉教者として殺されたのは獣の刻印を受け入れようとしなかった人たちだけではなく、獣の像を拝もうとしなかった人たちや、獣の名を受け入れようとしなかった人たち、さらに六百六十六である獣の名の数字を受け入れようとしなかった人たちも含まれました。

６は人の数字です。３は最終末を暗示する数字です。ですから、６６６すなわち３つの６は完全な現世欲を暗示しますが、それは人間的なもので神とは関係ありません。７は神の数字で、完全とか完成を意味します。だから、神は週の周期を６でもなく、８や１３でもなく７で設計しました。週の周期はどんな天文学的現象にも観測されることはありません。地球の自転によって昼と夜が、

月によって暦の上の月が、月を従えた地球が太陽を一周することによって年がわかるのです。しかし安息日、すなわち天地創造の７番目の日は、神に仕える高潔な長老たちから預言者、使徒、神の民へと代々伝えられてきました。神がある数字をお使いになることには意義があります。

さて、「獣の像」とはいったい何でしょう。ヨハネの黙示録１３章を読むと、それは「子羊のように」２つの角を持ち、しかも「竜のように」物を言い、悪魔自身によって息をふきこまれていました。ですから、この獣はまるでキリストのように変装しているものの、実は悪魔の性をもちます！聖書は偽物に対してはっきりと警告しています。イエス自身がこう述べています：「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。…偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わすだろう。不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。…」（マタイによる福音書２４章４～１２節）

パウロは次のように書いています：「こういう者たちは偽使徒，ずる賢い働き手であって，キリストの使徒を装っているのです。だが，驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。

「だから，サタンに仕える者たちが，義に仕える者を装うことなど，大したことではありません。彼らは，自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう。」（ 11コリント信徒への手紙11章13～15節）

有名な「ヨハネの黙示録の４人の騎手」のうち，最初の者は偽のキリストや偽預言者を表しています。ヨハネは次のように書いています，「また，わたしが見ていると，子羊が七つの封印の一つを開いた。すると，四つの生き物の一つが，雷のような声で，『出て来い』と言うのをわたしは聞いた。

「そして見ていると、見よ、白い馬が現れ、乗っている者は、弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上に更に勝利を得ようと出て行った。」（ヨハネの黙示録６章１，２節）

キリストが弓を持った姿はどこにも描かれていません。白い馬のために最初の騎手がキリストを描いていると誤った憶測をして、思い違いをした人もいます。しかし、ヨハネの黙示録６章に登場する４人の騎手が述べた一連の出来事は、マタイによる福音書２４章のキリストの預言と比べると間違えようのないものです。

ヨハネの黙示録　１３章で現れる「子羊のように」２本の角を持ちしかも悪魔のような別れた舌で「竜のように」ものを言う第二の獣は、「大バビロン」と呼ばれ聖書の預言の中でも偽預言者の支配を受ける非常に誤った宗教的な体制に過ぎないのです。

明らかに，この第二の獣は自分を拝むように仕向けることができるのです！従って、それは政治的、宗教的な体制です！それは国家への崇拝を奨励しています。それは最初の獣の経済的、産業的、軍事的な大きな力を指しています！それは自らに従う者全員にこの偉大な１０カ国連合に対する忠誠、隷属、協力と崇拝を促しています。

偽の預言者は悪魔の力を吹き込まれているので、「…の獣は大きなしるしを行って、人々の前で天から地上へ火を降らせた。更に、先の獣の前で行うことを許されたしるしによって、地上に住む人々を惑わせ、また、剣で傷を負ったが【西暦４７６年ローマ帝国が崩壊し、５５４年将軍ベリサリオの下での復活を示しています】なお生きている先の獣の像を作るように、地上に住む人に命じた。」

「第二の獣は【この偽預言者】、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。」（ヨハネの黙示録１３章１１～１５節）恐ろしい歴史の章では、バビロニアが「不可思議な」宗教を剣と槍によって多くの人に押しつけようとしたときに、何世紀にもわたり数え切れないほど多くの人たちが殺害されたことを詳しく述べています。何百万もの人が自分たちの宗教を「否定する」ことを拒み、ますます大きくなる獣の像の力を受け入れようとせず、また聖書にどう書かれていようとも「聖なる」ものと呼ばれていた「時」についての命令を受け入れなかったので、火あぶりにされ、生きたまま皮を剥がれ、拷問台に座らされ苦しみながら死んでいきました。

大規模な偽教会が古代ローマ帝国と同じ政治・軍事体制に基づいて築かれました！偽教会には、「枢機卿会議」に見られる昔のローマ教会や、大小の「教区」（dioceses：ローマ帝国の支配下にある政治的地域を表すローマ帝国の用語）を支配する規則が含まれます。

この発展しつつある政治・軍事体制がいかに不潔で嫌悪すべきものになったかということが，腐敗した数多くの法王の中でも，聖レオ１０世ただ一人の生活を垣間見るだけでも，その一端がわかります。聖レオ１０世はルターが宗教改革を始めたころ在位していました。レオは８歳のときに大司教になりました！１３歳のときに枢機卿に任命され，２７の異なる教会の職務を任命されました。*ハーレーのバイブル・ハンドブック*は、彼がこんなに多くの役職に任命されたことを次のように書いています。「…彼が１３歳になる前に莫大な収入があったことを意味する。教会の役職をただ単に収入源と見なすように教えられた。【このことは私も痛いほど熟知しています、と言うのも私は同じように貪欲な魂がしみ込んだ法王を大勢知っているからです。】法王のポストを得ようとして、教会の名誉を売った。教会の役職はすべてお金で買うことができ、多くの役職が新たに創られた。彼はまだわずか７歳の枢機卿を任命した。彼は教会の宗教的な健全さにはまったく無関心で、なんとか政治権力を得ようとして、王や王子と何度も何度も交渉を重ねた。彼はヨーロッパで最も豪華で放蕩を尽くした館を所有していた。彼の枢機卿たちは国王や王子たちと競って、幾重にも連なる召使たちに仕えられた豪華な宮殿で享楽的なもてなしを行った。しかし、この放蕩快楽によりウナム・サンクタムが再び容認された。その中では、人間は誰でも救いを得るためにはローマ法王の命に従わなくてはならないと言明されていた。【あなたはこの説を、以前どこで聞きましたか？】彼は既定の料金で免罪符を発行し、異教徒の火刑を‘神聖な取り決め’と宣言した。（同書７８０ページ）

神がこのような体制を次のように述べたのも不思議ではありません：「…なぜなら、お前の商人たちが地上の権力者となったからであり、またお前の魔術によって、すべての国の民が惑わされ、預言者たちと聖なる者たちの血、地上で殺されたすべての者の血が、この地で流されたからである。（ヨハネの黙示録１８章２３、２４節）

このように神の言葉は、大いなる教会政治が現れて、国王や皇帝を支配下に置き、それは国家となって他の国家と同じようにすべての国に大使を送り、またすべての国から大使を受け入れるだろうということを示しています。それはまさしく古代ローマ帝国に倣って作られた政治・宗教体制であり、獣の刻印であるのです！この巨大な体制はダニエル書７章８節で、「尊大なことを語る口を持ち」、そして「時と法を変えようとたくらむ」あの有名な「小さな角」として述べられています。この大いなる教会の長老たちはまさに同じ事をしました！彼らは、「聖なる父」という不敬な称号を名のる一人の人間の指導者に服従しない限り、人は救われないという教令を出しました！しかし神の民は教会についての真実を知っています。つまり、教会は人を救えないということ、教会は神の御業を成し遂げる際に神の手先となって働くために「召された人たち」の集まりだということを知っています。彼らは宗教的な意味でどんな人も「父なる神」と呼んではいけないこと、教会は礼拝の対象ではないことを知っています！いかなる人も救いを与える力はないことを知っています！しかし、「獣の刻印」すなわち多くの国を支配する大いに誤った教会は、個々のメンバーを、彼らが言うところの地獄の炎で永遠に焼かれるとされる「破門する」権力だけでなく、教会政治の最高権力者が、一国のすべての市民が地獄の炎で焼かれるとされる、国民全体を「普遍教会」から締出すという「禁止令」の権力も求めています。

そのような体制が揮う権力は想像がつきます。例えば、もし国王なり大統領が教会の最高権威者を怒らせたならば、気に障る国民全体を破門されることもあるのです。またたく間に、地獄での火刑を恐れた国民全員が立ち上がって、教会の支配者の愛顧を再び得るために国王や大統領を追放するでしょう！

普遍教会がヨーロッパの統一にどのように力を貸したのでしょう

獣の力がヨーロッパに最後に出現すれば, 必ず世界中を驚嘆せしめるでしょう！
それは世界でこれまでに見たこともない地球上で最大の巨大な力になるでしょう！その力は大きく, 強大で, 経済的な成長を伴い, 生産力があり盛大に繁栄しているので, 全世界の国民から敬愛、懇願並びに崇拝はもとより、その統治下にある大衆からの崇拝を喚起するでしょう！

やがて来るヨーロッパの超大国は主として単一の宗教を持つでしょう。では、ヨーロッパの主な宗教とは何でしょう。たいていの場合、それは**ローマ・カトリック教**です。

ヒトラーは国家崇拝を持ち込みました！常に「優秀な民族」を強調し、綿密に編成した松明パレードを行い、口角に泡を飛ばしながら絶叫し催眠状態に陥れようとする演説をしながら、彼はドイツ国民の個人の意思を彼の位置に服従させたのです。第２次世界大戦が始まる少し前に行わ

れた悪名高きニューレンベルグ・ナチス大会において、ルドルフ・ヘスは熱狂した大衆に向かって、「ヒトラーはドイツである！ドイツはヒトラーである！」と叫びました。このようにして、人と国家への崇拝が一体となったのです。完全な不信仰者の偶像礼拝です。そのようなことが再び起こるでしょう！

やがて来る「獣」、ヨーロッパ連合国家の独裁者は「解放者」と呼ばれ、礼拝されるでしょう！多くの女性がパレードを行っているアドルフ・ヒトラーの姿を見て気絶したと歴史は証明しています。ヒトラーに対する大衆の崇拝は一種の不信仰者による偶像礼拝でした！しかし聖書は、獣や偽預言者は両者とも崇拝されるだろうと述べています。

すでに、数１０カ国において法王を礼拝する無数の人々が存在します！このような人たちはまさに神自身の称号を名乗る人間を敬愛し、尊敬し礼拝しています！現代の法王は歴史上どの時代の法王よりも多くの人に礼拝されていることは確かです！間もなく登場するために舞台の袖で待っているのは、強大な独裁者、新しい「ヨーロッパの救世主」でしょう。彼は政界の実力者でもあり、世界が未だ経験したこともない巨大な力で１０の国を統一するでしょう。彼はまた自分の信奉者たちからお世辞や敬愛の念と共に礼拝を集めるでしょう。いいですか、このような国々の人々は獣を拝むだろうと聖書は述べています。丁度、数百万の人たちがアドルフ・ヒトラーを礼拝したように！諸国の人たちから礼拝をうける人が二人現れるでしょう－獣、すなわち政治・軍事の指導者と「偽預言者」、すなわち教会の指導者です。

タイム誌の最近号では、法王は今世紀で最も偉大な人の一人であり、彼が何百万もの人々に礼拝されている様子を指摘しています。

法王への敬愛、特に東欧に住む数百万のカトリック教徒の間で敬愛を受けている理由の一つは、彼が獣として現れるものを創造していく上で役に立っているからです！

ポーランド人のヴォイティワ枢機卿が法王に選ばれたとき、私は大勢の聴衆の前で、これは極めて重大なことである、と言うのはローマ法王は今やポーランド人であるからだ、と言いました。この事実がソヴィエト連邦のポーランド掌握を緩めるのに役立つ運動になり、同時にその運動を通して東欧や中欧の他の国でもロシアの鉄の掌握を緩めるだろうということはわかっていました。

何年間も私はラジオ、テレビ放送の説教で、「‘ヨーロッパ連合国’が結成され、それはウラル地方から大西洋までの１０カ国からなり、核兵器を所有するだろう。」と繰り返し述べてきました。

法王は西ドイツを訪問中に、「ウラル地方から大西洋までの欧州統合」を求めたのです！最近ヨーロッパの地図を見たことがありますか。ウラル地方はロシアに深く入り込んだ、モスクワの東にある山脈です！私が長年その表現を使ってきたのは、マッキンダーやハウスホッファーのような地政学者が世界の大国はヨーロッパの中心部に位置するだろうと信じて、同じ表現を使ったから

です！ヨーロッパの中心部、中央は数多くのローマ法王に支配されてきた「神聖ローマ帝国」が何度も復興した中心地でした。ほとんどの場合、それはドイツの王国だったのです！

注意して聞いてください！法王は現在ヨーロッパ連合国の結成を求めているのです！聖書の預言は、鉄の強さは獣の最後の復活となるが、陶土がもろくなるだろうと述べています。どの国が鉄であるのでしょう。どの国に「鉄の宰相」がいたのでしょう。それはドイツで、ビスマルクという人物です！どの国が鉄の十字で兵士を飾りたてているのでしょう。ドイツです！しかし、金属職人なら誰でも知っているように、陶土は鉄が注入されて鋳型に入るともろくなり、多分成型しているものを壊してしまうこともあるでしょう。同様に、１０カ国の結成が宗教という求心力で統合されようとも、法王の命を受けた偉大な普遍教会の下では、長く統一を保てないでしょう！ヨハネの黙示録の１８章をよく読んで、獣がどうして最後に「淫婦を嫌うようになり」、彼女を見捨てたのかを理解してください。

偽預言者は一時的に国家の礼拝をもたらしますが、皆が礼拝しているのは本当は悪魔です。

次の言葉に注目してください！「人々はまた、この獣をも拝んでこう言った。『だれが、この獣と肩を並べることができようか。だれが、この獣と戦うことができようか。』…獣は聖なるものたちと戦い、これに勝つことが許され、また、あらゆる種族、民族、言葉の違う民、国民を支配する権威が与えられた。

地上に住む者で、天地創造の時から、屠られた子羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拝むであろう。」（ヨハネの黙示録１３章４～８節）

これで誰が獣でありどんなものを指すかわかってきたので、獣の像をはっきり識別し、獣の刻印を探すことができるでしょう！

意識的な選択

「獣の刻印の間違った考えと関係のある妄想症のほとんどは心の底にある誤った思い込みから生じます。その思い込みとは，獣の刻印が誤魔化しによってか秘かに，怪しまれずに心の中に押し入るかもしれないという思いです。多くの人は，正しいキリスト教徒らしい生活を送り，神の言葉に従い，獣の刻印の支配下に置かれたくないと思っているものの，ヨーロッパやペンタゴン（国防総省），またはどこかの狡猾な陰謀者たちが彼らの心にこの忌まわしく気味の悪い獣の刻印を押し付け，社会保障番号の登録，個人識別カードの発行，或は多分マイクロチップか目に見えない刺青を埋め込む事に関わる，ある種の法律や要望に同意させようとしているのだと信じています。

しかし，次の聖書の言葉に注目して，今から読む内容を深く考えてください！「わたしはまた，多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり，彼らには裁くことが許されていた。わたしはま

たイエスの証と神の言葉のために,首をはねられた者たちの魂（ギリシャ語のpsucheで、「命」を意味する）を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。」（ヨハネの黙示録２０章４節）

食品包装に貼ってあるコンピュータが生成したラベルや、個人識別カードやコンピュータチップを拝む人はいません！

よく注意してください！こうした人たちが獣やその像を礼拝したり、その刻印を受け入れようとしなかったために、神の国で暮らし、今やイエス・キリストと共同の支配者とはっきり描かれている人たち、彼らは文字通り命を犠牲にしたのです！しかし、彼らは永遠に続く命を得ることを保証されました！

お分かりですか。ここにおいて、意識的な選択が行われるのです！彼らが獣、またはその像の礼拝を拒んだことに注目してください。それは、彼らはそれがどういうことなのか知っていたのだと教えてくれます。彼らは理にかなった、意識的な選択を行いました！かの悪評高い「異端審問」の途中で起こった、何十万もの人たちが聖書に基づく信念を捨てようとしなかったために殺されたときのように、獣と偽預言者は力ずくでキリスト教徒を屈服させ彼らを拝ませようと試みたことでしょう。彼らはそれを拒み、人間よりもむしろ神に従うことを選び（使徒行伝４章１０、１９節:５章３２節）、そのような選択のために彼らは殉教者となりました。実際、中世の時代にまったく同じ理由で殉教者となった人たちが数え切れないほどいました！

ハーレーはこう述べています、「…異端審問は宗教改革をつぶそうとする法王の努力の中でも主な営みだった。１５４０年から１５７０年の３０年間に９０万人もの新教徒が、法王が求めたワルド一派撲滅の戦いで亡くなったと述べられている。法衣を着た修道士や牧師が、冷酷な残虐さと非人間的な無慈悲で罪のない人たちを男も女も苦しめ生きたまま焼き殺す仕事を指図し、しかもそれをキリストの名において、「教皇代理」の直接命令によって行っている姿を考えてみなさい。（ハーレー著　バイブル・ハンドブック　７７７ページ）

このような人たちは獣やその像（大規模な偽りの教会、古代ローマの民間政府に倣って作られた政府のような教会至上国家）の礼拝を拒み、または獣だと確認できる刻印を受け入れることを拒んだために殺されました。

神の言葉のために殺害され、次のような言葉を叫ぶ人たちが描写されているヨハネの黙示録６章９，１０節　に注目してください。「神聖で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」墓の中から大声で叫んでいるように描かれたこの聖人たちは、何世紀も前に殉教者となりました。すると、獣、獣の像そして獣の刻印が非常に長い間私たちの周りにあったことが明らかになります。

お分かりですか。あなたが「偶然に」救いを見失うことはありえないのです！何らかの力があなたの生活に干渉して、あなたに神の救いを失わせるような象徴、それとわかるしるし、何らかの種類の「マーク」を押し付けることは絶対ありえないことです！

次の言葉に注目してください。「だれが、キリストの愛から私たちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

『わたしたちは、あなたのために、一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。

しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。

わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマの信徒への手紙　８章　３５～３９節）

如何なるものー剣（軍事力）も支配するものも, 権力もー貴方を神の愛, すなわちイエス・キリストにありその人による救いからあなたを引き離すことはできないと, 聖書は確かに約束しています。

ヨハネの黙示録２０章４節をもう一度読んでください！ここで甦った聖人たちはイエス・キリストによって約束された玉座につくことがわかります。（ヨハネの黙示録　２章　２６節；３章２１節）彼らは殉教した故に甦ったのです。どうして彼らは殉教したのでしょう。それは彼らがかたくなに獣の刻印を受け入れることを拒んだからです。

たとえ残忍な人たちがあなたを力ずくで押さえつけて皮膚の下に何らかの識別用マイクロチップを埋め込もうとしても、たとえ兵士たちがあなたの手足や腕をつかんで額の端から端へ黒い墨で２インチの巾で６６６と言う数字を刺青したとしても、あなたから救いを奪うことはできないという安心感をきっと抱くはずです！従ってそのようなことは獣の刻印ではないのです！

しかし、間違いなく！獣の刻印は確かに強制力をもつような—法律のようなものになり、人々はそれに従うように命じられるでしょう！人々は最後に究極の選択をしなければならないでしょう！その選択は、やがて生ずる大バビロン（世界の超大国として出現するはずです）と呼ばれる社会／経済、軍事／精神的な体系に屈服し、譲歩し協力するか、それとも死の罰を加えると脅されても協力を拒み—獣の刻印を拒むかのどちらかになります！

周知のごとく、マーク（刻印）とはスタンプであり、印であり、シンボル、確認できるラベルです！昔全能なる神は神の民をいつも区別する大きな印について神が言われた言葉があります。「あ

なたは、イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。あなたたちは、わたしの安息日を守らねばならない。それは、代々にわたってわたしとあなたたちとの間のしるしであり、わたしがあなたたちを聖別する主であることを知るためのものである。

「安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である。それを汚す者は必ず死刑に処せられる。誰でもこの日に仕事をするものは、民の中から絶たれる。

「六日の間は仕事をすることができるが、七日目は、主の聖なる最も厳かな安息日である。だれでも安息日に仕事をする者は必ず死刑に処せられる。

「イスラエルの人々は安息日を守り、それを代々にわたって永遠の契約としなさい。

「これは、永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。主は六日の間に天地を創造し、七日目に御業をやめて憩われたからである。」（出エジプト記３１章１３～１７節）このような言葉を宣言された創造主は神聖なるエロヒム、至高の存在にほかならず、イエス・キリストになられました！次の証に注目してください：「初めに言葉がありました。[ギリシャ語のロゴス、代弁者を意味する]、言葉は神と共にありました、言葉は神でした。

「同じことが初めに神と共にありました。[ギリシャ語のテオス、ヘブライ語の「エロヒム」のまさに同義語で、二人以上という意味を表す。創世記１章２６節を参照してください。]

「万物は言によって成った。成言によらず成ったものは何一つなかった。

言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」（ヨハネによる福音書１章１～４節）ヨハネはイエス・キリストの人類以前の神聖な起源について奥深い言葉を述べて福音を始めています！彼は更に続けて言っています、「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

「言は、自分の民[ユダヤ人]のところへ来たが、民は受け入れなかった。

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。…言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。[ギリシャ語：「タバナックルド」]（わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、）恵みと心理に満ちていた。」（ヨハネによる福音書１章１０～１４節）

キリストが人類以前に存在していたことははっきりと分かっていることであり、議論の余地はなく、今述べた節を誠実な気持ちで読みそれを神が明かした言葉として受け入れる人にはだれにでも明白なことです。しかし、何十万というキリスト教の牧師を職業とする人たちや何百万というその信奉者たちは、かたくなに言葉を受け入れようとしないのです！

大いなる偽りの教会で容認された教理や、みだらな女たちの結末に気づいていますか。それは旧約聖書の神、自らの手で十戒を書いた方はイエス・キリストになられた方であるという意味です。その方は変わらないのです！

パウロはこう書いています、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変ることのない方です。」（ヘブライ人への手紙１３章８節）

キリストになられた方は、安息日を創られた方で、安息日をご自身とその民の間の永遠のしるしとされた神聖な三位一体の一人です。

大いなる艱難

ナザレのイエス・キリストはこれまでに現れたうちで最も偉大な預言者でした。マルコによる福音書13章,ルカによる福音書21章並びにマタイによる福音書24章で見られる有名なオリベット預言で.差し迫った大いなる艱難について語ったのはキリストです。大いなる艱難の際立った特徴の一つは聖人たちの殉教です。イエスはこう言われた,「そのとき[大きな艱難の最中に],あなたがたは苦しみを受け,殺される。また.わたしの名のために, あなたがたはあらゆる民に憎まれる。

「そのとき,多くの人がつまずき、互いに裏切り,憎みあうようになる。」マタイによる福音書24章9,10節）

悪魔に息を吹き込まれた偽預言者、神自身の称号を盗用しようとする大いなる宗教指導者は、眞のキリスト教徒を迫害するために社会的権力を利用するでしょう！黙示録の書の七つの封印のうち最初の五つの封印が次々と開かれていく様子を注意深く調べましょう。最初の五つの封印はヨハネの黙示録の６章にあります。

ヨハネが見ているところで開かれた最初の封印は白い馬に乗り、弓を持って勝利を得るために出かけようとする人であることに注目してください。キリスト教徒がまず注意しなければならないことは「偽のキリストと偽預言者」であるとイエスが言ったにもかかわらず、白い馬は大きな波となって押し寄せる宗教的情熱、大いなる偽預言者が徐々に表れて世界中に名をとどろかせることを意味するのは明らかです。偽預言者は結局Ⅱテサロニケの信徒への手紙　２章の預言を実現し、不敬な称号を語り、イエスの預言によれば、「可能とあれば」神の選民をもだます偉大な奇跡を行う力を得ようとします。

次に現れる馬は赤い色をしていて、戦争の象徴です。このことと、イエスがマタイによる福音書２４章で「戦争と戦争のうわさ」について述べられたことを注意深く比べてみてください。

第三の封印は黒い馬で、明らかに生活に必要な食糧の極度の不足を示しています。イエスが言ったようにまさしく次に起こることは飢饉でしょう！黒い馬は、現代でも私たちが経験するような地球上の飢饉の象徴です。

第四の封印が開かれ、ヨハネが見ていると「青白い馬」が現れ、乗っている者の名は「…死といい、これに陰府が従っていた。彼らには、地上の四分の一を支配し、剣と飢饉と死をもって、更に地上の野獣で人を滅ぼす権威が与えられた。」（ヨハネの黙示録６章８節）

イエスの預言によれば、偽のキリスト、戦争や飢饉の後に何かがすぐ続いて起こったのでしょうか。キリストは「社会的弊害」と言われました。核物質や放射能の降下、夥しい人命損失、通信設備、水道・電力供給サービス、汚水処理等の都市基盤の破壊を伴う戦争の荒廃は恐ろしい弊害、すなわち空気、水や土地の汚染、地表水の汚染、あらゆる種類の恐ろしい病気の発生を引き起こします。今述べたことは、互いに重なり合っていることに注目してください。

第五の封印が開けられた時, ヨハネが見たのは神がカインに言われたのと同じように, 「お前の弟の血が土の中から私に向かって叫んでいる。」と大声で叫んでいる殉教者たちの比喩的な命です。

象徴的な意味で、ヨハネは幻の中で「神の言葉と自分たちがたてた証のために殺された」何十万という数え切れない人たちを見ます。（ヨハネの黙示録６章９節）

彼らは大声で叫びながらこう言います、「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか。

「すると、その一人一人に白い衣が与えられ、また、自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで、なお、しばらく静かに待つようにと告げられた。」（ヨハネの黙示録６章１０，１１節）大昔、このようなキリスト教徒は獣またはその像を礼拝することを拒み、その刻印を受け入れようとしなかったために殺されたのです！

ここでは象徴的な意味で、無数のキリスト教徒の失われた命が神に向かって叫んでいる様子がわかります！「異端審問」の途中で百万人近いワルド一派の残酷な殺害について読まれたことを憶えていますか。バビロニアの不可思議な宗教、またその宗教が支配する国の権力に従うことをかたくなに拒んだのはこうした人たちであり、ほかにも歴史を通して同じように殺された無数の人たちがいます。彼らは死ぬまで自分たちの命をいたわったのではなく、「最後まで耐え抜く」キリスト教徒は誰でも救われるというイエス・キリストの約束に忠実であったのです。

彼らが、「仲間の僕たちも殺されるまで待つ」ように言われたことに注目してください。

仲間の僕たちはいつ殺されるのでしょうか。勿論, 未来の大きな艱難の最中であり, 天のしるしによって全能なる神が介入する直前に起こると預言されている聖人たちの次の大きな受難です！

私たちは２つの別のできごとを扱っている点に注目してください。第一に、何十万という数え切れない神の真の僕が彼らの信念のために命を落としたという歴史上長く続いた時期がありました！彼らは「永遠なる主よ、いつまで待てばいいのですか。」と叫んで、神が彼らを苦しめる者たちに彼らの血の復讐を行うのを待っていました。

２番目の聖人たちの大いなる殉教は将来、第五の封印が開けられたときに起こると述べられており、それはイエス・キリストによって「大きな艱難」と呼ばれています。（マタイによる福音書２４章２１，２２節）彼らは、仲間の僕たちが何世紀も前に、獣またはその像を礼拝することを拒み、その刻印を受け入れようとしなかったために殺されたのと同じ理由で「死に至るまで命を惜しんではいけない」のです。

刻印とは何でしょう？

獣の「刻印」は単にその象徴であり、それを区別するしるしまたはラベルです。それは、神と神の民の間の「刻印」すなわち固有のしるしに対する偽物です。

周知の通り, 全能なる神は選ばれた民に対して印, すなわち固有の象徴となるものを作りました！

神がその民イスラエルに定めた固有のしるしは安息日と安息年でした。週も年も含めて、神の安息日すべての完全な表がレビ記２３章に載っています。

いいですか, 安息日は天地創造の最中に人が創られた時にできたのです！「天地万物は完成された。

「第七の日に, 神は[エロヒム, イエス・キリストとなられた方；ヨハネによる福音書１章, ヘブライ人への手紙１章]御自分の仕事を離れ, 安息なさった。

「この日に神はすべての創造の仕事を離れ. 安息なさったので, 第七の日を神は祝福し, 聖別された。（創世記２章１～３節）

旧誓約書の神、宇宙や太陽系、地球とその中に棲むすべてのものを創造された方、アダム、ノア、アブラハム、イサクやヤコブに話しかけられた神、モーセに話しかけ十戒を書かれた神、[安息日を聖なる日としておくために書かれた４番目の戒律を含めて]、この神は神の家族の一員で聖母マリアから生まれイエス・キリストとなられた方です！

更に次の証に注目してください：「神はかつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くの方法で先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また御子におって世界を創造されました。御子は、神の栄光の繁栄であり、神の本質の完全な現れであって、万物をご自分の力ある言葉によって支えておられ

ますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」（ヘブライ人への手紙１章 １～３節）

神の家族の一人、安息日を創れたエロヒムはナザレのイエス・キリストその人ですと、聖書に書いてあります！

神はこう言われた。「まことに、主であるわたしは[永遠に！]変わることがない。あなたたちヤコブの子らにも終わりはない。」（マラキ書３章 ６節）

神は不変です。神は掟を変えて人間の反乱に合わせることはありません。神は移り変わる社会の規準や慣例に合わせたり、官能的で欲望を抑えきれず罪深い人類の気まぐれに迎合するために、神の教訓を都合よく変えることはありません！

キリストとなり安息日を創られたのは、三位一体の一方です。そうだとすると、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」とイエスが述べられたのは不思議ではありません。（マルコによる福音書２章 ２７，２８節）

それでは、どの日が「主の日」なのでしょうか。もちろん、安息の日です。新約聖書全体の中で、「週の第一の日」という言葉が使われているのはわずか７箇所です。それぞれの言葉を完全に理解するためには、それは聖書が日曜日の礼拝を認めていないという証拠ですが、私は聖書をまじめに研究する人にサミュエル・バキオキ博士の*安息日から日曜日*へを読むように強く勧めます。その著書は、ローマ・カトリック教会が神の安息日を、神の子に代わって太陽神にちなんで名づけた太陽の日の祝賀に変えた事実を、おそらく完全な研究記録として述べています。

サミュエル・バキオキ博士の著書、*安息日から日曜日*への序文の中で、博士は次のように書いています：「調査によれば、安息日に代わる日曜日の採用は使徒の権威のお陰でエルサレムの原始教会では起こらなかったが、約一世紀後にローマ教会で起こったということがわかります。ユダヤ人、異教徒並びにキリスト教徒の要因が互いに影響しあって、安息日を放棄して代わりに日曜日を採り入れるようになりました。」私は、この小冊子を読んでいる人で、どの程度にしろ自分は学識がありここで提起された根拠の一部を受け入れたくないと思っている人に、是非サミュエル・バキオキ博士の本を一冊手に入れて徹底的に研究してもらいたいと思います。その本は１９７７年　ローマのポンティフイカル・グレゴリアン大学出版局で出版されました。4569 Lisa Lane, Berrien Springs, Michigan 49103 （著者の住所）に手紙を書けば、本を入手できます。

引用されている何十もの情報源、研究の規模の広さ、その書物の労を惜しまぬ方法と完璧さは絶対納得のいくものです。

例えば、ユダヤ人に彼らの宗教を信じることを禁止し、特に２つの特徴的な慣習、安息日と割礼を禁止したのはハドリアン皇帝の政策であったことが示されています。

ハドリアン皇帝の迫害は「ユダヤ的」と思われるあらゆるもの、特に週の一度の安息日と過越しの祭り祭りを，背教者たちの教会が次第に否定するきっかけとなりました。

バキオキはこう書いています：「ハドリアン皇帝の命令によりユダヤ・キリスト教の信者や司教が異教の人に代わったという事実は、両者の間にはっきりとした差別が行われていたことを示しています。その差別は民族的な要因にとどまらず、新たな神学上の対応、特に過越しの祭りや安息日のような典型的な祝日に対する対応も含まれたと思われます。このように推測するのもエピファニオの証言によるもので、彼は過越しの祭の日時の論争に関する詳しい報告の中で、次のように述べています：『割礼を行う司教たち（ユダヤ人の司教達が去った後、論争が起こりました[実際は、扇動された][西暦135年]、そしてその論争は今日まで続いています。』司教は特に、西暦１３５年までエルサレムの教会を運営し、その当時まで１４日目の過越しの祭り[ナサン月１４日の過越しの祭り]を執り行った１５人のユダヤ・キリスト教の司教のことを述べています。彼らの考えは使徒憲章として知られる文書に根ざしており、次のような規則があります。『暦ををを変えてはいけない、しかし割礼を行った同胞たち、彼らとともに過越しの祭りを祝いなさい。』」（*安息日から日曜日へ*、１６１ページ）

ニケアの宗教会議（西暦３２５年）が教会の教義や慣習から「ユダヤ人的気質」のあらゆる形跡を最終的に取り除く基盤を築き、ラオディケアの会議（日時は論争中）が積極的にそれを確立しました。

ラディケアの会議の２９則にはこう書かれています：「キリスト教徒はユダヤ教に倣って安息日に休むことなく、その日には仕事をしなければならない；しかし、キリスト教徒であるから，主の日[日曜日]は特に敬い、できればその日に仕事をしてはいけない。」

しばらくの間は、背教者たちの教会で混乱が増してきたので、安息日も日曜日も両方とも祝われました。その当時の２人の古代歴史家、ソゾメン（４４０年頃　生存）とソクラテス（４３９年頃　生存）はこの二重の祝賀を記録しています。

ソクラテスはこう書いています：「世界中のほとんど全ての教会は毎週安息日に聖なる神秘[聖体]を祝うけれども、アレクサンドリアやローマのキリスト教徒は昔の言い伝えにちなんでこの習わしを止めてしまった。」（*安息日から日曜日へ*、１９６ページ）

注目してください！こうした歴史家たちは、キリストの復活後４世紀以上後、すなわち（建国２００年余りの）アメリカ合衆国が国として存在する２倍以上の期間がたってから、「世界中のほとんど全ての教会は…安息日…を祝う」と認め、書き記しています。

ソゾメンも次のように書いています。「コンスタンティノープルをはじめとして、いたる所で人々は週の初めの日同様、安息日に集っている」（同書１９７ページ）

教会史をまじめに研究する人はみなサミュエル・バキオキ博士の*安息日から日曜日*を読まなくてはなりません。過越しの祭りに代わってイースターが行われるようになり、安息日の代わりに日曜日が選ばれたいきさつの完全な記録を読めば十分納得できます。

いいですか、神は安息の日をスタンプ、シンボル、ラベルまたは神ご自身と神の民の間の刻印のような偉大な確かなしるしとして定められました。しかし、待ってください！神は安息日を複数で言われました！当然いくつかの安息日を心に抱かれていたのでしょう！神はまたその民イスラエルに一連の七日に一度の安息日、聖なる日、を告げ、それは季節が変わるにつれて徐々に人類のための神の偉大な計画、救いの計画そのものを表しました！

「安息日は人のために定められた。…」とイエスは言われた。（マルコによる福音書２章２７節）安息日は定められたものなのです。その日は永遠なる創造主によって定められた聖なる時であり、主はその日に自らの存在を表して天地創造の仕事を休み、この期間を人類に与えて大いなる祝福とし、仕事を完全に休んで回復と復帰の日とされた。すなわち、神の御業である天地創造を深く考え、祈り、研究し、同じ心を持つ同胞たちと交わる日、－神への礼拝の日－とされました。

安息日は天地創造の途中で定められ、人が創られたときにできました。その日は人類のために定められたのであって、「ユダヤ人」のためではありません！ヤコブ（イスラエル）の子供たちが生まれるまで、「ユダヤ人」（全ユダヤ人の名称となる祖先、「エヒュディ」まだ「ユダ」から由来している）と呼ばれる人は誰も存在しませんでした。しかし、安息日は何千年もの間守られてきました。安息日はシナイ山よりずっと早くから存在しました。

神は安息日を、シンボル、または固有のラベルのようなしるしとして定め、神ご自身と神の民の間の確かな「刻印」とされました。人がいつまでも神の安息日を憶えていることは、アブラハム、イサク並びにヤコブの神、つまり創造主として神を憶えているために極めて重要であることを神はご存知でした。ユダヤ人はキリストを斥けましたが、旧約聖書に書いてあることを固く守り、安息日や安息年を守りました。

ユダヤの民は安息日を忘れた事はありませんでした！週の周期は自然界ではどこにも見当たりません。惑星、太陽、月または星の動きで、週の周囲を示す運行はありません。地球の運行で週のどの日に当たるのかを示すものはありません！安息日は天地創造の際にキリストとなられた方によって定められ、デカローグ（十戒）の中でイスラエルに再び告げられ、決して忘れられたことはなかったのです。

イスラエルが神に従って安息日を守っていた頃、人々は祝福を受けていました。安息日の教えを破り、偶像崇拝、たいていは何らかの形の太陽礼拝に変わったとき、彼らは呪われ、苦しめられ戦をしかける隣国に征服されました。

北の十士族、イスラエルの家の歴史を通して、彼らが信じられないほどの罰、神の掟を破る当然の報いとしての呪い—更に外国の軍隊の侵略、囚われの身となり再び奴隷に落ちぶれる—このような苦しみを受けないように神は彼らに神のもとに戻って偶像を捨てるように説きました。
しかし彼らは神の言葉を聞こうとしなかったのです。

その結果、度重なる侵略で、シャルマナセル王の指揮下にあるアッシリア軍はイスラエル人を捕虜にしました！

「主はイスラエルに対して激しく憤り、彼らを御前から退け、ただのユダの部族しか残さなかった。」（ 11列王記下17章6 ～18節）

イスラエルの民は安息日の掟を破り、神が定めた安息日と安息年を放棄したために退けられましたが、それを守っていれば彼らは神の計画、人の生活のための神の意図を知りえたでしょう。
彼らと彼らの神の間の確かなしるしを拒むことにより、彼らは神が万物の創造主であるという事実を見失い、偶像崇拝、太陽礼拝を行うようになりました。

神が彼らに課した確かなるしるしを拒んだので、彼らは文字通り歴史から消え失せました。非常に多くの人が、アメリカ人は非ユダヤ系の血を引く「異邦人」だと考えています！イギリス、アメリカ合衆国、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギー、スウェーデン、フィンランドそれに英連邦諸国やフランス、スイスの一部の真の正体を理解している人はごく一部です。

キリストが現れる頃までに十士族のイスラエルは歴史から消滅しました。２，３の種族から出たほんの一握りの人たちの名が述べられているだけです：アシュールの出のアンナ、ベンジャミンの出であると言うパウロ。彼はもともとユダと境を接していました。

しかしユダヤ民族は決して歴史から消え去ったのではありませんでした。なぜなら、彼らも偶像崇拝を行うようになり，民族の罪に対して 70年に及ぶバビロン捕囚の苦しみを経験したものの，彼らは決して安息日や安息年を忘れなかったからです。彼らは神がその民に課した印を守りました！

ヨシアのような正義感のある王が命令を下して真実が回復し、民族の悔い改めがなされる度に、人々は神の定めた安息日をまもり、過越しの祭りを祝い種なしパンを何日か食べ安息年を守ったので、私たちは神の計画を忘れずにいます。

お分かりになりましたか！獣の刻印は知らない内に秘かにあなたに忍びこんだものではありません。

刻印を拒むことは可能です！

空想の中で、ヨハネは時間を越えて現世紀へ、更にはるかに大きな艱難の時、天に現れるしるし、そして主の日へと飛び出しました。

ヨハネの黙示録の１５章と１６章で、ヨハネは神の天使たちの救いと最後の七つの災いの最中に神の怒りが罪深い人たちに注がれる光景を書き留めています。

天使たちの描写に注目してください：「わたしたはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た。更に、獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たちを見た。彼らは神の竪琴を手にして、このガラスの海の岸に立っていた。

「彼らは、神の僕モーセの歌とその子羊の歌をうたった。『全能である神, 主よ, あなたの業は偉大で驚くべきもの。諸国の民の王よ. あなたの道は正しく, また, 真実なもの。』」（ヨハネの黙示録１５章２～４節）

諸国の民の王とは誰ですか。もちろん、甦った天使たちです！彼らは大地から取れた「最初の収穫」であり、以前に亡くなったがキリストの到来と共に甦った全ての人と共に生き残った最後の世代のキリスト教徒です!（Ｉテサロニケの信徒への手紙４章１６～１８節）彼らは神を恐れ、聖書を信じるすべての真のキリスト教徒です。この空想で見たものは、ただわずかな部分の神の天使ではなく、すべての天使たちを表わしています

キリストはまもなくこの地に帰られるでしょう、—おそらくあなたが生きている間に！この大きな出来事が起こる時に、何百万もの天使たちが甦り、ほかにも無数の人たちが直ちに変えられるのです。ヨハネが見た光景は、彼らが「ガラスの海」すなわち神の御座の前にある透明で水晶のようなものの上に立っている様子を表わしています。そこに立っているのは、復活し魂の生まれ変わった夥しい数の天使たちで、ちょうどキリストの再臨の時に死から昇華して肉体から魂へと変えられるのです。（１コリント信徒への手紙１５章５０～５２節）

これはすべての教会、地から採れる最初の収穫全体、偉大な最初の復活を表わしています！これは何か達成すべき特別な任務、克服すべき特別な問題を抱えている、ある孤立した少数グループのことではありません。そうではなく、それは偉大な最初の復活です。それは神の御座の前に立ってモーセの歌を高らかに歌っているところを描かれたすべての天使たちです！

彼らのそのような描写は何を表わしているのでしょう。彼らは獣とその像、その刻印に、またその名の数字に勝利を収めたものたちです！

質問：もしあなたがこの獣が実際何であるか、また誰であるか知らなければ、つまり、もしその像が何であるか、またその刻印が何であるか知らなければ、どのようにしてそれに勝つことができるでしょうか。

獣の像や刻印の起源は大昔ですが、それがキリストの再臨まで続いていることは明らかです！

あなたは日ごろ獣の刻印、その像　名前、その名の数字との戦いを意識していますか。もしあなたが安息日を守る賃金所得者で、日曜日を祝う世界で家族の食費や衣服代を稼ぐために一生懸命働いているのであれば、あなたはそのような戦いを十分意識しています。

一週間のうちで買い物客で最も忙しい安息日に仕事をしなければならなかったために、仕事を辞めなければならなかった人が何千人もいます。日曜日を祝う世界では、もしあなたが神の言葉に従い神の定めた安息日を守ると決心したのであれば、「物を売買したり」仕事を行うのはほとんど不可能なこともあります！数え切れない数の学童たちは、両親が神の聖なる日を祝うために学校を休むようにというので、恥ずかしい思いをし屈辱感を味わってきました。また、成績が下がったり、無断欠席のために罰を受けることもありました。

何千人という人たちが雇用者に働きかけて、日曜日や祭日に仕事をしてもいいが金曜日の日没から土曜日の日没まで安息日の休暇をもらうよう頼みましたが、彼らの要求は断られました。獣の刻印に抵抗することが何を意味するかということがわかったのはそのときです！その痕跡、太陽の日を表わす固有のラベルは、キリスト教徒を明言する西欧社会でいたるところにあります。

何百万という人たちが思い違いをしています！獣の刻印はまだこれから発展するようなもので、身分証明書とか目に見えない刺青、または皮膚の下に埋め込まれたマイクロチップとかプラスチックのクレジットカードだと信じている人が多いのです。こうしたことはすべてナンセンスです！そういうことを信じている人は聖書について、歴史や預言について何も知らないのです！獣の刻印とはキリスト教徒が、たとえ殉教の苦痛があったとしても、意識的に拒むものです！いかなる社会的権力もあなたから救いを無理に剥奪したり、あなたに神の怒り—七つの最後の災いを注ぐこと—を受けさせることはできないのです！神の大きな怒りに触れ、神がこの地球上に下す大きな災いを受けるのは、神に従おうとせずその代わりに現世のやり方に迎合する人だけです。

愛している人があなたに怒っているとき、あなたはどんな気持ちですか。夫や妻、息子や娘、親しい家族の仲間とか仕事関係の人があなたに対して激怒しているときはどうですか。当然あなたは動転し、不安になり、たぶん気落ちして怖いと思うでしょう。でも、もし天にまします全能なる神があなたに対して大いに激怒しているとしたらどうですか。

獣を尊敬し, その像を崇敬し, その刻印やその名の数字を受け入れる人に対して神は激怒しています！

日頃、獣とは何であるか、その像は何でありまた誰であるか、その刻印とかその名の数字は何であるかということに本当に気付いているキリスト教徒をあなたは何人知っていますか。

ショッキングだと思われるかもしれませんが、「キリスト教徒」を明言し教会へ通う何百万もの人が自分は救われていると信じているものの、実際は獣の像の一端を担い、生活の一部としてその

刻印を喜んで受け入れています。彼らは完全に騙されていて、自分がバビロニアの不可思議な宗教に閉じ込められていることを知らないのです！

獣の像はどのようにして造られたのでしょう

預言の中の獣はまもなくヨーロッパにその不気味な姿を現すでしょう！それは１０カ国から構成される筈であり（ヨハネ の黙示録１７章３，１２節）、たぶん統一後のドイツが「ヨーロッパ連合国」の先頭に立ち、化学・生物兵器と共に自らの核貯蔵庫を所有しそれを世界のどこにでも運ぶ手段を備えているでしょう。自分を作った人たちを同様させているフランケンシュタインの怪獣のように、新たな極右勢力のドイツがいつかは出現して、他の多くの中欧の国々と緊密な協力を経て１０カ国の政治統合を果たすでしょう。

世界の人たちがこの超国家的で、強力な経済・政治・軍事統合を礼拝することに注目してください：「…そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。竜が自分の権威をこの獣に与えたので、人々は竜[サタン！ヨハネの黙示録１２章９節]を拝んだ。人々はまた、この獣をも拝んでこう言った。『だれが、この獣と肩を並べることができようか。だれが、この獣と戦うことができようか。』」（ヨハネの黙示録１３章３，４節）

ヨハネが見た獣は，キリストに似た偽の生き物でした。それはキリストのような容姿をしていました！しかし，悪魔のような話し方をしました！続いて読んでみましょう：「この獣は、先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい，地とそこに住む人々に，致命的な傷が治ったあの先の獣[ローマ！歴史上で復活を果たすいわゆる「神聖ローマ帝国」]を拝ませた。（ヨハネの黙示録１３章１１，１２節）

「致命傷」というのは，ローマ西暦４７６年に滅亡した時受けた傷でした。ユスティニアヌス皇帝が西暦５４３年にベリサリウス将軍をカルタゴへ，後にローマへ派遣して東ゴート族の王を倒した時に，その傷は「癒され」ました。「３本の角を引き抜いた小さな角」（ダニエル書７章８，２０節）は、歴代の「聖なる」ローマ皇帝同様にユスティニアヌス皇帝やベリサリウス将軍によって（追放）、それにヘルリ族です。

さて、次の言葉に注意してください：「この獣は[「子羊のようで、」竜やサタンのようにものを言っていた]大きなしるしを行って、人々の前で天から地上へ火を降らせた。更に、先の獣の前で行うことを許されたしるしによって、地上に住む人を惑わし、また、剣で傷を負ったがなお生きている先の獣の像を作るように、地上に住む人に命じた。[ローマ]第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。」（ヨハネの黙示録１３章１１～１５節）

ローマカトリック教会は最初からローマ帝国の様式に従って作られました。それは階級制度で、権力の頂点にあるものは、まるで神のように崇められました。古代ローマの皇帝は自らを「神」と称し、一般に「天帝」と呼ばれ、かつて生存した最も淫らに堕落し、狂気で下品で残忍な人間にありがちなように神を冒涜したと言われています。

ローマ教会は何世紀にもわたって発展しますが、西暦３２５年のコンスタンティヌス帝の時代までは決して一人の法王の下まとまりのある統一された教会ではなかったのです。歴史上、二人以上の法王が存在した時期があり、それぞれが互いに破門し合っていました。マラキ・マーティンは、一般に知られていないローマカトリック教会について多くのことを記録しています。（マラキ・マーティンの著書には次のようなものがあります：*富める教会、貧しい教会「カトリック教会とその財源（副題）」；ローマ教会の興亡；最後のコンクラーベ*）彼以外にもローマ教会の高位聖職者の継承問題の特徴となった信じられないような言い逃れ、権力政治、闘争を記録した著者がいます。そのうちの一冊、デイビッド・A・ヤロップが著した、神の名において、*法王ヨハネ・パウロ一世殺害の調査*、は法王ヨハネ・パウロ一世は暗殺されたのだと断言しています。その著作は主張している内容を立証する多くの記録と３２ページに及ぶ写真を載せています。

２世紀（この時代は利用できる筆記された情報が比較的少ない闇のとばりから現れる教会は、使徒の教会とはほとんどの点においてまったく異なるものであることを歴史は証明しています。

イエス・キリストが建てようと言った教会（マタイによる福音書16章18節）は，自らを「定められたときに生まれた者」と述べたパウロ，元の11人に加えてバルナバやその他のものたち，更にイスカリオテのユダに代わったマタイも含めた初期の使徒たちの「集まりの場」，（ギリシャ語，エクレシア）でした。彼らは週に一度の安息日を守り続けましたが，そのことについては新約聖書に議論の余地のない絶対的な証拠があります。彼らは年に幾度かの安息日，例えば，五旬節（新約教会の誕生　—使徒言語録２章），種なしパンの日々（１コリント使徒への手紙５章），そして過越しの祭り（１コリント信徒への手紙11章），を守り続けました。ルカはキリストの昇天からかなり後に西暦55～56 年ごろ「断食の日」（贖罪の日—使徒言語録２７章９節）について述べています。

彼らはちょうどキリストが行ったように，教暦の一月に当たるニサンの月（アビブとも言う）の１４日に過越しの祭りを行いました。しかし、何千人という異邦人が幾世紀にもわたって教会集団に入ってきました。そのような人たちはますます人の意見を採り入れ、ユダヤの宗教では見られない様々な習慣や行いにたやすく適応した教会に心を惹かれました。

魔術師シモン・マガス（マガスは使徒言語録８章の「マキ」に由来する）と彼のライバルたちの動向の話は完全な一冊の書物になる研究課題ですが、ここで扱うことはできません。しかしながら、ローマに「シモン・ペートル」または「パーター」（ラテン語で「父」）と言う人がいましたが、彼はシモン・ペーターとは別人でした。「ペーター」で小石・石）と「パーター」の「父」）の間には何のつながりもありません。

ローマの信徒への手紙を注意深く調べてください！パウロは西暦５０年代にローマで大勢の教徒に語りかけます。しかし、ペーターという名はその手紙に一度も出てきません！ペーターという名は挨拶にも、本文の中でも、個人的な別れの挨拶にも使われていません。その中には２７名以上の人がその名で呼ばれていたのです。どうしてでしょう。ペーターはバビロンにいたからで、そこにはユダヤ人の集団がいました。ペーターは割礼を受けた人たちの使徒でしたが、パウロは異邦人に対する使徒でした。（　１ペトロの手紙５章１３節を参照）

２世紀の初めに教会の歴史が開幕するまでにまったく異なる教会が現れ始めます。
パウロはテサロニケの人たちに起こっていることを語っています。彼はこう言いました：「だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。この者は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、傲慢にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです。（ 11 テサロニケの信徒への手紙２章３，４節）

魔術師シモンは「神の大きな力」と呼ばれ、奇跡を行う力を持っていました！パウロが罪深い人について、「…すべて神と呼ばれたり拝まれたりするもの」の上に君臨する「滅びの子」の話をしたとき、おそらく魔術師シモンのことを考えていたでしょう。しかし、パウロは現代の預言、すなわちキリストが復活する前の最後の数年に起こると思われることを書いています！

パウロは、「教会内にあるこの狡猾な力が現れるのを抑えている。」と言いました。（６～１１節）彼はそれを「不法の秘密」[罪、無法を意味する]と呼び、「それは既に働いており、それを抑えるものだけが[真の意味]、真最中にそれが現れるまで抑え続けるであろう。」と言いました。この意味は、罪深い人、秘密の宗教を信奉する個々の人たちは自分が誰であったか、誰が真最中に現れるのか明らかになるということです。

いいですか、神はパウロを通して次のように警告されました。「また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとするものが現れます。」（使徒言語録２０章３０節）

コンスタンティヌス帝の頃までに、発展しつつある普遍教会の中でも多くの争い、意見の異なる教派がありました。司教の任務は、アンタキア、アレクサンドリア、エルサレム、コンスタンチノープルそれにローマのような大きな都市の場合、首都大司教区に発展してきました。安息日はまた守るべきだとか、弟子たちと同様にキリストもそれを守ったと主張する人が大勢いました。過越しの祭りはニサン月の１４日に行われるべきだと言う人も大勢いました。後に彼らは「クワトデシマン」と呼ばれましたが、それはラテン語で「１４日」すなわち、過越しの日は神が命じたとおりニサン月の１４日に行うべきだと主張する人たちを意味しました。しかし、増えつつあった洗礼を受けた異邦人を受け入れることを望む新しい教派がたくさん現れ、彼らはバール、イシス、ケモシュ、ミルコムの象徴や、太陽、月や季節の象徴を礼拝しました。

有名なニケアの宗教会議（西暦３２５年）は、普遍教会で混乱を生じていた多くの教派の相違を解決するためにコンスタンティヌス帝によって召集されました。その会議は４０日間続き、コンスタンティヌス帝自身はもとより３７０名の司教と数人の首都大司教も出席しました。アリウス主義、ドナトゥス派の教義、並びに当時発展しつつあった普遍教会の意見の相違を起こしていた他の分派の問題を扱う、最初の全キリスト教会の会議として歴史に名をとどろかせました。

後のラオディケアの会議では、ニケアの会議で採択された多くの方針が広く取り入れられました。安息日や年間の聖なる日、特に過越しの祭りに関してもっと厳しい法令がたくさん出されました。法令の中でも復活祭を行うことに関する法令は重要でした。それはキリスト自ら、更に初期　の弟子たちや１世紀のキリスト教会が行ったように過越しの祭りを行って「ユダヤ教化した」人たちへの禁止令だったのです。

この頃までに、「週の最初の日」を「主の日」とすることが、ますます教会の標準として受け入れられてきました。聖なる安息日を守り続けたり、クワトデシマシのように安息年を守り続けた何千という人たちはローマ帝国内の至る所に分散しましたが、彼らは次第に強力になりつつあったローマ帝国の権力に制圧されました。ほとんどの人は歴史から消え失せました。何世紀もの間、バビロンの不可思議な宗教体制の普及に抵抗し続けた人たちについてはごく断片的な情報しかありません：ボゴミール派、ペテロブリュイス派、アーノルディスト派、ワルドー派、バウドア派；これらはヨーロッパの多くの国民の中のグループで、弟子たちが説いた最古の真実に固執し、日曜礼拝「イスタール」（イースターと発音される）や１２月２５日に祝うサトゥルナリア祭；ユールログ、ヒイラギの輪、ヤドリギ、そして性と生殖の象徴としての丸い実を受け入れようとはしなかったのです。

しかし大多数の人はほとんど抵抗しない道を選んで進みました。殉教を恐れた人たちは神の決めた安息日や聖なる日に休むことを「撤回して」、教会が認めた日曜日、クリスマスそして復活祭の慣習を受け入れました。これまでに「改宗しない」で不可思議な宗教に踏み込んだ人たちの大部分は異邦人でした。このような異教の太陽崇拝民族にとって、カトリック教の秘密を受け入れることはほんの小さな一歩に過ぎなかったのです。というのはその宗教の罠は、ごく最近になって新たに信奉者が生まれた異教の精神に非常によく似ていたからです。

この顕著な例がメキシコ・シティーにあります。そこの国立博物館には古代の「洗礼に使用した」洗礼盤（「パピティゾ」は「水に浸す」ことを意味するので，用語の矛盾が見られます）があり，その特徴は台座に大きな蛇が幾重にも巻きついて石の洗礼盤全体を形成しているからです。その蛇は「ケツァルコアトル」（翼を持つ蛇神を意味するインディアン語）の形をしていて，アズテックやその他多くのメキシコ，中南米地域の原住民の神でした。文字を持たない原住民がちょうど蛇神のように見える洗礼盤から「聖水」を振りかけてもらうために，「僧」に近づくことは，彼らにとって決して大きな変革ではありませんでした。特に武装した兵士がそれを強く要求したときはそうでした。

これは古代ローマ帝国が利用したのと同じ策略を採用したに過ぎませんでした：「一言で言えば、ローマ政府の組織は見事であっただけでなく…全ての市民は皆と一緒になって皇帝を崇拝しなければなりませんでした。なぜなら皇帝は領国の主権と威光を表わしていたのです…すべての人は良き市民として、神としての国家元首への公然たる犠牲に参加しなくてはならなかったのです。（中世と近世，１章，７ページ，私の強調）

結局、獣の「刻印」は造られたものでした！さて、大規模な普遍教会が出現しつつありました。その教会には昔のローマの「コレギア」のようなローマ教皇庁、すなわち枢機卿会があり、絶対的な権威を持つ一人の支配者に従う、全く抑制と均衡のない上意下達的なピラミッド型階級制度によって支配されました。歴史はそのような指導者たちの甚だしい悪弊で満ち溢れ、百科事典が一杯になるほどの膨大な問題がありました。昔のローマ帝国の「イメージ」は、知識のない無知な人々にとっては子羊のように「キリストのような」ものに思われたのです。しかしそのメッセージは悪魔のようであり、竜の声でした！神の決めた安息日の代わりに、太陽神の日、つまり日曜日を当てました。過越しの祭りや種なしパンの代わりに、「四旬節」[聖書のどこにも記述がない] や「復活祭」が採り入れられました。トランペットの祭り—イスラエル人の正式な「新年の日」（暦年の始まりすなわち第七月の最初の日に当たる）—に代わって、沈滞した冬の真ん中に「新年の日」が決められました。「ハロウィーン」、つまり「諸聖人」の宵が採り入れられ、同時に悪魔の地獄の象徴である子鬼、、魔女、黒猫、カボチャの提灯、焚き火、騒々しい祭り、酒盛り、すなわち死や暗黒の色彩や死神のサムハイン（ドルイド教の信仰）がその重大な晩に死者の「魂」を再び割り当てるという信仰が採り入れられました。世界中のいわゆる「キリスト教徒」たちが次第に異教の祭りを祝い始めました、ちょうど大規模な普遍教会や今日のみだらな女たちがそうするように。（ヨハネの黙示録１７章５節）

神の定めた安息日は大多数の人たちから忘れられました。それを守っている人たちはすぐにわかります。なぜなら彼らの全生涯は結果的に困難や迫害で満ちているからです。学校に通う子供たち、職を求める賃金所得者など、日曜礼拝の世界で安息日を守る人達にとってはあらゆることが極めて困難となりましたし、その状況は現在も続いています。

神の選民のしるし

「刻印」ではなくしるし、象徴、固有のラベルとは何でしょう。獣と像を礼拝し、進んでそれに自らの「差し伸べ」[握手、快托、同意の象徴]、それに協力する人たち当然その烙印、つまりラベルを身につけています！

しかし獣と、その像、その刻印、その名の数字に打ち勝った人たちは「…モーセの歌をうたい」、それは神と神の定めた十戒を讃えています。ヨハネの黙示録１４章９，１０節を読むときには、獣の刻印を受け入れその像を拝むものはみな最後の七つの災いで神の怒りに苦しめられるだろうという点にもう一度注目してください。しかし、本文のわずか２節後に出てくるそれとは対照的な

集団に注目してください。「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である。」（ヨハネの黙示録１４章１２節）

モーセの歌は神の定めた十戒を讃えています！モーセはその掟を授ける仲介の役を果たしました。甦った聖人たちは獣と、その像や刻印に打ち勝ち、十戒を固く守った者たちでした。

「もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」とイエスは言われた。（マタイによる福音書１９章１７節）キリストはヨハネを励まして次の言葉を書かせました。「わたしたちは、神の掟を守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。『神を知っている』と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で, その人の内には真理はありません。」（１ヨハネの手紙　２章３, ４節）

終末の聖人たちは、「…その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証を守り通している者たち。」（ヨハネの黙示録１２章１７節）という風に書かれています。

神の掟には第四の戒めも含まれており, それにはこう書かれています：「安息日を心に留め, これを聖別せよ。六日の間働いて, 何であれあなたの仕事をし[この戒めはあなたの仕事, 労働, 商売や生計を立てることに関係があります], 七日目は, あなたの神, 主の安息日であるから, いかなる仕事もしてはならない。」（出エジプト記２０章８～１０節）

神は安息日を大きな試練の掟として定めました！それは忠誠を試すものです！反抗的なイスラエル人が安息日を守ろうとしなかったとき, 十戒を授ける前に神はこう言われました, …あなたたちは、いつまでわたしの戒めと教えを拒み続けて、守らないのか。」（出エジプト記１６章２８節）

永遠に続く別個の契約として、神はご自身と神の民の間の大きなしるしとして安息日を定めました。イエス・キリストになられた方の罪と私の罪を背負って磔にされた方が、大きな声でそれを創るように言われました。「…あなたたちは、わたしの安息日を守らなければならない。それは、代々にわたってわたしとあなたたちとの間のしるし[ラベル、確認できる印、シンボル、マーク]であり、わたしがあなたたちを聖別する[比類なき聖なるものとして、際立たせる]主であることを知るためのものである。安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である。…イスラエルの人々は安息日を守り、それを代々にわたって永遠の契約としなさい。これは、永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。（出エジプト記３１章１２～１８節）

ペンテコストの時から、この偉大なるしるしは国籍や人種を問わずあらゆる人々に適用されます。その理由は、「…もしキリストのものだとするなら、とりなおさず、アブラハムの子孫であり、契約による相続人です。」（ガラテアの信徒への手紙３章２９節）

更に手や額の象徴化に注目してください。手は「握手」において、挨拶ないし合意の形として差し出されます。「さあ、これで手を打ちましょう。」と言うとき、如何に多くの商談が成立したことでしょう。大多数の人間は右利きです。協力、快托、同胞愛や尊敬のしるしとしての「親密

さを伝える右手」は、一般的です。キリストは父の右手に座っていますが、それはキリストが完全に合意し協力していて、二人は全てにおいて一体であることを示しています。さて、次のことに注意してください！
本来の過越しの祭りと種なしパンの時期　―神の定めた安息年―に関して、神はキリストとなってこう言われました：「あなたは、この言葉を自分の腕と額に付けて記憶のしるしとし、主の教えを口ずさまねばならない。［心に残さねばならない］」（出エジプト記１３章９節）

「更に，これ［神の掟］をしるしとして自分の手に結び，覚えとして額につけ」（申命記６章８節）

更に次の言葉に注目してください：「あなたたちはこれらのわたしの言葉を心に留め、魂に刻み、これをしるしとして手に結び、覚えとして額に付け」（申命記１１章１８節）

額は我々人類の両目の間にあって、そこには脳の前頭葉があります。私たちの意思、すなわちものごとを選択する力、意志の力、自由な道徳の働きが備わっているのは、この前頭葉です。脳の他の部分は私たちの運動能力、記憶、歩いたり、座ったり、食べたり、咳をしたり睡眠をとる能力を司っています。しかし額の後方にある部分は人格が存在するところです！

７という数字は，天地創造の最後の日に当たる安息日つまり休息の日に見られるように，完成や達成を意味する神の数字です。６は人間の数字で，自らの仕事や目的のために人間に授けられた数字です。３という数字は「終局」を表わす神の言葉の中で何度も使われています。３つ並んだ６は、神聖で霊的なものとは対照的に「究極の現世欲」や「完全に人間的」なことを象徴しています。

不可思議な数字　―６６６

６６６という数字は、古代ギリシャ神話のタイタンからアメリカ大統領ドナルド・レーガン、ネロ皇帝から法王、昔の「推理小説」の「秘密のシンボル」から現代の「スーパーコンピュータ」の複雑な回路に至って、ありとあらゆる人や場所やものにつけられました。

陰謀を唱える人は６６６を「ニューエイジ運動」と結びつけようとします。著書*虹の隠れた危険*の中で、コンスタンス・カンベイは、その忌まわしい数字はニューエイジ運動の明白な特徴であると主張しています。ニューエイジの信奉者たちは６６６を聖なる数字と考えていると彼女は主張しています。ニューエイジで６を３つ並べた構成を想像的に解釈しようとしたカンベイ氏の試みは興味深くはありますが、彼女の説を支える証拠が明らかに足りないこともあって、その著書の信憑性にはほとんど役立っていません。

著名な作家ハル・リンゼイ氏は、その著、*新しい世界の到来*、で、「６という数字は聖書の中で人類を表わすから、６６６の意味は人間が三位一体を模倣しようとしていることだと思う。（人の中で６が３つ一体となる）」と述べています。この見解は非常に人気があり、数多くの解説者に支

持されていますが、それは広く抱かれている誤った仮定—神は三位一体である—という仮定から始まっています。

ある一派の預言解釈では、ネロ皇帝に獣の数字をつけています。しかし、次のような事実が明らかになるにつれ、この主張の信頼性も低くなっています。マウンスの意見に注目してください。

「今日最も受け入れられている説は、６６６はネロ皇帝に当たる数であるということです。ラテン語の綴りにすると同じくネロ皇帝の名前になるという別の数字６１６の解釈によって、この説が支持されています。この説では、ラテン語の名前をギリシャ語の形でヘブライ語に転写して換算しなければならず、しかも綴りに不備のあるままで転写しなければならないという事実が重視されていません。（ロバートＨ.　マウンス、*新約聖書の新しい解説*、２６４ページ）

いくつかの出典によれば、ローマを建設し最初の王になったと言われるロムルスのヘブライ語並びにギリシャ語の名前の合計は６６６になります。このことは、ある人たちにとって、「ローマン」という名の人はみんなローマという名をつけられた人の「名」を背負っていることを示しています。

ロムルスのギリシャ語はラタイノスで、「ローマ人」を表わし６６６の数値を生み出します。面白いことに、「ラタイノス」は２世紀に神学者イレナエウスによって（著書、*Against Heresies*）数の謎を解くいくつかの可能な説の一つであると述べられています。

しかし転写の際の問題や、ロムルスという名の人物が果たして存在したかどうかも確かではなく、また文字通り何千という名前、称号、言葉が６６６という数値になり得るという事実などで、その主張は危うい基盤に立っています。

３つ並んだ６の数字の烙印を押されたローマ人は、ロムルスというネロ皇帝だけではありません。アドベンティスト派は法王のラテン語の称号 -VicariusFilii Dei-の文字が６６６になると唱えています。しかしながら、人は多くの称号を持てば持つほど、「数え方」が多くあればあるほど、少なくともその人の称号ひとつが６６６の数値を生み出す可能性があります。-法王は称号に事欠かず、預言の解釈も数え方に事欠くことはありません。」その上、Vicarius Filii Dei とは正式に認められた称号ではありません。

しかし、「獣の数」について聖書には何と書いてあるのでしょう。数の意図する目的は何でしょう。「６６６」はコンピュータの数字でしょうか。それとも教会の数字？あるいは、宗教指導者の数字でしょうか。

ヨハネの黙示録１３章１５～１７節を開いて,以下の重要な点に注目してください。

（１）獣の数字は「神の名前」である！

（２）その数字は「人間の数字」である！

（３）獣の刻印か名前,またはその名前の数字のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできない。

（４）その数字は知恵と判断力のある人なら「数える」ことができる。

（５）その数字は「六百六十六」、６６６である。

獣の数字は人間の数字であり、人間の名前の数字であって、コンピュータの数字でもなければ「ニューエイジ」の数字でもなく、レーガン元大統領やスープの缶の数字でもありません。

獣は復活したローマ帝国であり、復活した軍事・政治体制の上に君臨する人を指します。獣の「像」は古代ローマ帝国に倣ってできた大規模な普遍教会制度であり、それはカトリックの指導の下に「聖なる」ものと呼ばれていました。

ネロ皇帝,ムッソリーニや他の歴史上の人物は終末の獣に相当するタイプであったかもしれませんが,その人に関して預言は実現しませんでした。

その人物が登場すると,知恵や判断力のある人達はその人を見分けるでしょう.そしてその人の名前は(或いは,あだ名)が何らかの数のシステムで６６６の数字を生み出すこともわかるでしょう！

ドイツの通貨基準がドル（ドイツ語の谷に当たる「ターラー」に由来するやポンドではなく、マルク（MARK）と呼ばれていることは興味深いものの預言上は意義深いことはないでしょう。フランスの通貨基準も「マルク」であって、フランス語では「フラン（Franc)」と呼ばれているのは面白いことです。「料金別納（franked)」封筒は前もって郵便料金が刻印されています。ヒトラーは「第３帝国」にまんじの記号「鍵十字」を採用しました。やがて来る獣の権力はおそらくどんな数であれ異なった名前、標章、しるしを持つでしょう；多分それは、キリストが彼の民に見張るように命じたとおり世の中の発展を本当に「見張っている」人たちに判別できるような貨幣基準を利用するでしょう。

個人識別カードや皮膚の下に無理やり埋め込まれたコンピュータチップが「獣の刻印」ではないからと言って、獣の権力がその全ての市民に何らかの調査を行わないということにはなりません！獣の刻印を受け入れないものは「物を売ることも買うこともできない」という事実は確かに重要です。

獣が現れたとき、獣の預言を理解する人はおそらくその名前の数を数えようとする前に獣に気付くでしょう。そうすると「６６６」は獣を識別する唯一の手段ではなく、獣だとわかる最初

の手がかりでもない。むしろ、それは終末の獣の正体を示す多くの要因のうち、唯一の多分最後のものです。

現在の法王は「洗礼者ヨハネ」の偽物のように、偽のキリストとなる者がたどる道を用意しているのではないかと、多くの人が推測しました。シクストゥス４世の称号を持つ法王が５人もいたことに気付いている人もいますし、当然彼らは最後にもう一人の法王が現れて「シクストゥス６世」の称号を得るのではないかと思っています。このようなことが起こっても起こらなくても、それは無駄な憶測にすぎず、一つだけ確かなことがあります：獣に乗る「女性」とは、ローマカトリック教会に他ならないのです！その女性は偉大な「諸国の女王」であり（イザヤ書４７章を読んでください）、みだらな女たち[彼女から生まれたみだらな女たち]や地上の忌まわしい者たちの母です。（ヨハネの黙示録１７章５節）

彼女のしるしは十字のしるしであり、日曜日、イースター、クリスマス、そしてハロウィーンのしるしです！彼女は「時と法を変えようと」たくらんだことがあり、（ダニエル　書７章　２５節）、獣とその像（ 法王による教会政治 ）を礼拝し獣の名の数を受け入れるために、その像を受け入れることを拒んだという理由で神に仕える 聖 人たちを最後に死刑にしました。彼女にはみだらな娘たちがいて、彼女の主導権を拒否しながらも、彼女の最も重要な教義や信条の多くに固執しています。その中には、「信徒の教義」（まったく聖書の教えに反する）を朗読したり、ドクソロジー（栄唱）を朗読したり歌ったり、 魂 と 三 位一体の永遠不滅を信じたり、太陽の日や「サトゥルナリア祭」（クリスマス）や「イスタール」（イースター）に捧げた祭りのように古代の異教徒の祭りの日に礼拝する人が何百万人もいます。

神は次のように警告しています。「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ。彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神はその不義を覚えておられるからである。」（ヨハネの黙示録１８章４，５節）

これから現れる獣はおそらく「ヨーロッパ連合国」と呼ばれるでしょう。キリスト降誕のときにキリストによって滅ぼされる終末の王として（ダニエル書の２章で）ダニエルが解釈した姿をしたものの十本の足がそれを表わしています。これと同じ１０人の王がヨハネの黙示録　１７章７～１４節で述べられていて、彼らは「神聖ローマ帝国」の 次 々に復活する７番目の頭にあります。この１０の国が「…この者どもは子羊と戦うが、子羊は主の主、王の王だから、彼らに打ち勝つ。子羊とともにいる者、召された者、選ばれた者、忠実な者たちもまた、勝利を収める。」（ヨハネの黙示録１７章１４節）

いいですか！神に仕える聖人とは、獣と、その像、その刻印に、またその名の数字に勝利を収めたものたちです。それを進んで心（額）に受け入れ、それに（右手で）協力する者は神の怒りに触れ、最後　の七つの災いを被るでしょう。

それに抵抗する者、それに打ち勝とうとする者、獣とその像を拝もうとしない者たちは、彼らの信仰心の犠牲となって殺されるかもしれません！しかし、彼らは永遠の命を受け継ぎ、結果的には救いを受けるのです！神は、「私の民よ、彼女から離れなさい」と私たちに命じています。現代のバビロンから、その不可思議な宗教から離れるために神の恵みと力と勇気が与えられ、獣の刻印と獣の像、その名の数字に気付く叡智が授けられますように。

―終―

この資料は、変更することなく無料で著者と出版社に配慮した上で、コピーして友人や家族に配布することができます。一般大衆向けに出版することはできません。

この出版物は個人的な研究手段として利用されることを対象としています。人の言葉を何でも受け入れるのは賢明ではないということを知っていただき、全ての問題をあなたの聖書の中から自分で証を立てるようにしてください。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱　７４７Flint、テキサス　75762

電話番号:(903)561-7070 . Fax: 561-4141

当福音協会のウェブサイトで多くの文献が無料で入手できます

www.garnertedarmstrong.ws

ガーナーテッド・アームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています